第５学年　総合的な学習の時間　学習指導案

特別支援教育専修 3 年　西田 有佳里

1．単元名　「心も体もユニバーサルデザイン　～みんなにとって過ごしやすい空間づくり～」

2．単元の目標

・バリアフリーやユニバーサルデザイン、みんなが過ごしやすい空間について考えることができる。
（知識・技能）

・自分たちだけではなく、みんなが過ごしやすい空間をつくるために、さまざまな人の立場に立って考え、工夫することができる。（思考力・判断力・表現力）

・「みんなにとって過ごしやすい空間」をつくるために、友達やインクルーシブな社会を作るために行動している人と協力し、自分たちができることを実践しようとする。
（主体的に学習に取り組む態度）

3．評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
様々な活動を通して、バリアフリーやユニバーサルデザインについてわかったこと、みんなが過ごしやすい空間について考えたことを話したり、書いたりしている。	みんなが過ごしやすい空間をつくるために、様々な人の立場に立って考えたり、子どもフェスタの設定などを工夫しようとしている。	みんなにとって過ごしやすい空間を作るために自分にできることを考え、自分から調査･活動を進めている。

4．単元について

（1）教材観

本学習では、あらゆる人が孤立したり、排除されないように支え合うことのできる「インクルーシブな社会」をつくる担い手意識や当事者意識を育てることを目的にしている。学習では、児童たちが障がい体験や障がいのある人へのインタビューなどを通して、「みんなが過ごしやすい空間」とは何かについて考え、学校で開催される「子どもフェスタ」を実際にデザインすることで、インクルーシブな社会づくりへ参加していく。授業では児童の当事者意識や担い手意識を育成するために、当事者として周りの人の意識を変えられるように行動している二人を教材化する。

1 人目は筆者の友人であり、肢体不自由の中途障がい者であるＦ氏である。障がい体験や障がいのある人から話を聞くことが、障がいや障がいのある人について知り、共に生きる「インクルーシブ」な見方や考え方を育むことにつながると考えたからである。Ｆ氏はバリアについて、「車イスでは、段差や坂、運動場などが移動しにくい。車イスになって、私の身の回りにたくさんの【バリア】があるけど、障がいがなかったときに【不便】【使いにくい】と思っていたことが、日常生活を送る中で【バリア】になっていることも多い。」と話す。また、「自分が障がい者になったときに、初めて気づくことばかりで、たくさんの人に助けてもらいながら生きているのだと実感した。みんなには、障がいがあるという壁をつくるのではなく、困っているときにはたくさん助けてほしい」と語っている。Ｆ氏

と対話することで、バリアというものは段差などといった物理的な意味での【物のバリア】と、障がいがある方と障がいのない方の心の距離の意味での【心のバリア】があることに気づかせたい。

2 人目は、ESD マスターに認定されている山形大学附属特別支援学校の阿部友幸教諭と生徒達である。阿部教諭と高等部の生徒たちは実際に「インクルーシブな社会」へ行動を起こしている参画者である。阿部教諭たちの行動にあこがれ、思いを受け止めたうえで、実際にイベントを企画しその空間をつくる行動を起こすことが、インクルーシブな社会の担い手意識や当事者意識を育てることにつながると考えている。阿部教諭とは「過ごしやすい空間」について注目していきたい。児童たちは過ごしやすい空間について家や自分の部屋と答えたり、友達や家族がいるところなど具体的に答えるだろう。しかし、「みんなが過ごしやすい空間」と言われると、楽しい、温かい場所など抽象的な回答が多くなると考える。特別支援学校に勤める阿部教諭は「みんなが過ごしやすい空間」について、「相手を尊重できる態度、互いに思い合い、考え合った環境のある場」と語る。特別支援学校と通常学校の『交流及び共同学習』では、障がいのある児童たちが、「障がいがあるから優しくしようとしている児童」と、「同じ年(代)の友だちとして仲良く交流しようとしている児童」と関わっている姿を比較すると、後者と関わっているときの方が楽しそうに過ごしていると述べる。「こういう特徴 (障がい) があるから、○○すればいい」という考えは優しさではあるが、一方でパターン化された支援は全ての人にマッチするわけではないことに気付かせたい。さらに阿部教諭からは高等部の生徒たちと、インクルーシブな社会づくりに参画している事例を紹介する。具体的に、フードバンク・フードドライブの活動をしている方の営みを学んだり、「世界の中で食べ物で困っている人たちのために自分たちにできること」について自分たちで考え、行動を起こしている。自分たちと年齢の近い若者の行動にあこがれ、自分たちも行動したいという意欲を引き出すことができると考える。

(2) 児童観（省略）

(3) 指導観

インクルーシブな社会への行動化として、【物のバリア】と【心のバリア】に注目しながら、「みんなが過ごしやすい空間」を目指し、学校で「子どもフェスタ」を児童たちと企画し運営する。子どもたちの日々の学びを発表する「子どもフェスタ」に児童からお年寄りまで地域に住むたくさんの人たちを学校に招待する。障がい体験から学んだり知識や、ゲストティーチャーとの出会いから「みんなが過ごしやすい空間」について具体的に考えたりした上で実践することで、自分たちの周りにインクルーシブな社会をつくる行動化を起こすことができると考えた。

本学習でのキーワードである「みんなが過ごしやすい空間」を自分事化していくために 3 つの工夫を行う。1 つ目の工夫として、「スクール・ミッション　～道具を使って学校を移動してみよう～」を行う。スクール・ミッションでは、車イスに乗ったグループ、アイマスクをつけたグループ、耳栓とイヤーマフを使ってジェスチャーでコミュニケーションをとるグループの 3 つに分かれ、学校内にあるミッションに挑戦する。当事者・サポート担当を決めて、2 人 1 組で取り組むため、障がいの体験と障がいのある人とのかかわりの体験をすることができ、児童たちは主に、【物のバリア】について気づくことができると考える。

2 つ目は、児童たちが「みんなにとって過ごしやすい空間」について考えやすいように、ゲストティーチャーとの交流をすることだ。体験や身近にあふれる【バリア】を予想することで、【物のバリア】については見つけるだけでなく、当事者である F 氏に評価をもらう活動を取り入れる。児童た

ちの予想をF氏に認めてもらい、この探究の補足として【心のバリア】を紹介してもらうことで、学びを深めたい。さらに、【物のバリア】や【心のバリア】があるから無くすのではなく、つくらないような社会にしていく考え方に出会わせる。F氏が児童たちに語ってくれた生き方に迫りながら、大切なことが障がいなど関係無く「みんなにとって過ごしやすい空間」を意識してつくることであることを考えさせたい。このような考え方をゲストティーチャーが教えるのではなく、問いを連続させストーリーのある学びから児童が自ら気づくようにすることで、障がいの有無に関わらず、みんなで相手のことを思いやってよりよい社会をつくるエネルギーにしていきたい。さらに、「みんなで相手のことを思い合い、より良い社会を作っていきたい」という態度を育みたいと考えている。

3つ目は、児童たちの社会参画を促していくために、子どもフェスタを通して「みんなにとって過ごしやすい空間づくり」を実践したり、自分たちの活動を関西 SDGs ユースアクションに応募することである。学習を通して、学んだことや感じたこと、考えたことをまとめたり、共有したりする機会はあるが、学校内での活動にとどまる場合が多いため、社会参画をしたり社会に発信することで、児童たちのそれぞれの学びを本物にすることが出来ると考える。そのために、実際に奈良県内でバリアフリー事業を行っている団体や、地域活性化の活動を知ることで、「みんなにとって過ごしやすい空間」をともにつくるために行動している人びとに憧れ、さらに行動意識を高められるようにしたい。

(4) ESD・SDGs とのかかわり

・本学習で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

【多様性】

児童たちが住んでいるまちには、赤ちゃんからお年寄りまでたくさんの人が住んでいること。

私たちが何気なく過ごしている空間の中にも、誰かにとってのさまざまな「バリア」があること。

【公平性】

私たちだけが過ごしやすい空間が、誰にとっても過ごしやすい空間ではないこと。

誰かにとって過ごしにくい空間ではなく、みんなが過ごしやすい空間であること。

・本学習で育てたい ESD で育てたい資質・能力

【批判的に考える力（クリティカル・シンキング）】

私たちが何気なく過ごしているところにも、誰かにとっての「バリア」があることに気づき、どのように工夫するか考える。

【進んで参加する態度】

障がい体験や当事者の話を聞く中で、「バリアとは何か」について考え、解決するために行動する。

・本学習で変容を促す ESD の価値観

【世代内の公正】

私たちが過ごしやすいだけでなく、全ての人が過ごしやすい空間について考える。

【人権・文化を尊重する】

私たちの周りには、誰かにとっての「バリア」があることに気づき、障害の有無に関わらず、みんなで相手のことを思い合い、より良い社会を作ろうと行動する。

「みんなが過ごしやすい空間」について考え、工夫する中で、相手の悩みや思いに寄り添い、

相手を尊重して行動する。

・目標達成が期待される SDGs

【10　人や国の不平等を無くそう】【11　住み続けられるまちづくりを】

5．学習活動の概要（全 20 時間）

	主な学習活動	指導上の留意点
みつめる（①～③）	○「スクール・ミッション ～道具を使って学校の中を移動してみよう～」に参加する。 ・３グループに分かれて、学校の中のミッションに挑戦する。 ○スクール・ミッションを通して気づいたことや考えたことについて伝え合う。 障がいのある人は生活の中でどんなことを「バリア」に感じているのだろう。	・「車イス」「アイマスク」「耳栓・イヤーマフ」の３グループに分ける。 ・３グループに分けた後、道具をつける担当とサポート担当の２人１組を作成する。 ・体験中に困ったことが、障がいのある人たちが感じている「バリア」だということに気づかせる。 ・学校内の「バリア」から、学校の外にあるバリアにも興味を持たせる。
しらべる（④～⑨）	○スクール・ミッションを通して疑問に思ったことや気になったことについて調べ、障がいのある人たちが生活の中で「バリア」と感じていることを予想する。 ○障がいのある方に、自分たちが考えた「障がいのある人たちの生活の中でのバリア」の予想を伝え、実際に生活をしている中で困っていることについて話をきく。 ・視覚障がい者 ・聴覚障がい者 ・肢体不自由者 ○山形大学附属特別支援学校の生徒の「世界中で食べ物で困っている人たちのために自分たちにできること考え、実践するアクション」について知る。	・スクール・ミッションで活動した３グループに分かれて、質問したいことを考えたり、バリアの予想を伝えて実際のところを聞く。 ・障がいのある人の話は全員で聞くが、スクールミッションで活動したグループが、対応する障がい種の人に質問することとする。 ・GT に車イス生活をする前と後で変わったこと、感じたこと、考えたことなどを伝えてもらう。 ・障がいのある人がぶつかる【物のバリア】と、【心のバリア】について話してもらう。 ・「みんなが過ごしやすい」というキーワードを提示してもらう。 ・「子どもフェスタ」をデザインすることを伝える。

		・GT に協働への参加に誘ってもらう。
ふかめる（⑩～⑮）	みんなが過ごしやすい空間をつくるために私たちにできることを考えよう	
	○「みんなにとって過ごしやすい空間」について考える。 ・学校ですごす人や学校を使う人に「使いにくい」「不便」についてインタビューする。	・F 氏の話にあった、みんなの「使いにくい」「不便」に目を向ける。 ・どうして過ごしやすい必要があるのかについて考えさせる。 ・日常生活の困りごとを、付箋に書き出し、教室後ろに掲示する。
	○子どもフェスタを「みんなにとって過ごしやすい空間」にするために必要な工夫を考え、行動する。 ・どんな人が訪れるのか、その人たちが困ったり、不便に感じそうなことについて、体験やインタビューを通して感じたことをもとに想像したり、まとめる。 ・工夫したいことについて、「誰に対して」「どんなバリアがあるのか」「どんな工夫をするか」の 3 つの観点に分けて考える。	・子どもフェスタで行う工夫について、各グループで考えたことを異なるグループの児童に伝えて意見をもらう機会をつくる。
	・NPO 法人奈良元気もんプロジェクトの方に、自分たちの考えた案を紹介し、評価やアドバイスをもらう。	・バリアフリー事業を行いはじめたきっかけ、イベントを開催する中で気をつけていること、協働への誘いのコメントをいただく。
	・参加者に評価してもらうアンケートを作成する。	・全体的な評価と、子どもたちがこだわったポイントの両方を評価してもらえるような作りにするように促す。
ひろげる（⑯～⑳）	○子どもフェスタを振り返り、感じたことや考えたことなどについて伝え合う。 ・参加者アンケートを参考に、子どもフェスタの良かったところや改善点などを振り返り、伝え合う。 ・活動を通して、これから自分たちができることを考える。 ○関西 SDGs ユースアクションに応募する。	・学習を通して、感じたことや考えたことなどを書き残し、児童たちの学習の過程や一人ひとりの行動や考えの変化を可視化していく。 ・子どもフェスタを終えてからも、残すとよいデザインがあれば、学校の中に残す。